

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：33301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14387

研究課題名（和文）ピアサポート活動への参加による学生の発達過程 1年間の縦断調査による検討

研究課題名（英文）Educational Effect of Peer Support in University

研究代表者

永井 暁行（Nagai, Akiyuki）

金沢星稜大学・教養教育部・准教授

研究者番号：90824045

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ピアサポートを通じた学生の発達を検証することであった。その成果として、第1に新型コロナウイルス感染症の感染拡大事態におけるピアサポート活動についてのインタビュー調査を行った。この結果、COVID-19の影響下にあっても、学生ピアサポーターは新入生をはじめとする学生への支援に熱意を持っている学生がいること、その熱意を教職員が積極的に支援する必要性がコロナ禍では大きくなることが示された。

第2に、12の大学・短期大学に所属する学生ピアサポーターから縦断調査の協力を得られ、これによりピアサポートに継続的に参加することが学生の支援への意欲や支援技術の向上に寄与する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、大学における学生による学生支援の効果を検証した。特に、支援する学生にとって、「支援する側になる」ことの意義に着目した。大学生は大学において支援される立場であるが、同時に他者を支援する力も持ち合わせている。本研究から、大学生によるピアサポートは支援される学生だけでなく、支援する学生にも意義があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine student development through peer support.

First, an interview survey was conducted on peer support activities during the spread of coronavirus infection. The results showed that even under the influence of COVID-19, peer supporters were highly motivated to support freshmen and other students, and that the need for staff to actively support this motivation was greater in a coronavirus disaster. Second, cooperation for the longitudinal study was obtained from peer supporters belonging to 12 universities and junior colleges, which suggested that continuous participation in peer support may contribute to the improvement of students' motivation to support and their support skills.

研究分野：教育心理学

キーワード：ピアサポート 大学教育 学生支援 学修支援

1. 研究開始当初の背景

ピアサポートとは、仲間同士の対人関係を利用した支援活動の総称である。ピアサポートの領域は医療、精神保健、福祉、教育など多岐に渡る(松下, 2015)。このような多様な領域の中でも、近年教育場面において、特にピアサポートの重要性が訴えられるようになってきた。日本学生支援機構(2007)においても、学生生活や進路上的の悩みに学生が助言するピアサポート等の、積極的に学生間のネットワークを構築することの有効性が述べられている。日常的な場面においても、友人からのサポートは大学生の適応に関連することが示唆されており(永井, 2016)、学生間のサポートは学生生活支援に有効であると考えられている。

ピアサポートが教職員等による支援と大きく異なる点として、サポートの提供者であるピアサポーター自身の成長という視点が含まれる点がある(山田, 2010)。教育場面におけるピアサポートは、学生目線の支援ができるという点と、ピアサポート活動に携わる学生(以下、学生ピアサポーター)自身の発達を促すという2つの点で意義が大きい。

この2点の意義を生かし、ピアサポートを教育プログラムとして取り入れようという試みは、これまで主に小学校から高校までの学校段階で積極的に行われてきた(e.g. 中野他, 2002)。このような教育実践により、教育場面におけるピアサポート実践のノウハウが蓄積され始めている(e.g. 春日井他, 2011)。大学教育場面においても、ピアサポートを制度として実施している大学は2015年時点で49.9%と半数近くにのぼり、未実施の大学においても40.6%は今後実施したいと回答している(日本学生支援機構, 2017)。このように、大学教育の中でもピアサポートに注目が集まっている。

しかし、学校教育にピアサポートを取り入れていく中にも、課題が残されている。それはピアサポート活動が学生ピアサポーター自身の発達にいかに関与しているかが不明瞭であり、教育的効果のエビデンスが乏しいということである。学生ピアサポーターの成長を取り上げた研究の多くは実践報告や記述的な研究に留まっており、国内外問わず実証的な研究が求められている(Baginsky, 2004; 近藤他, 2016)。従来の知見は主に学生のレポートや教員の評価によるものが多く、対象となった学生の人数も少ないなど、そのエビデンスの質は十分ではなかった。

教育場面においてもエビデンスの産出とそれに基づく教育が必要であると言われる(岩崎, 2010)。学生のピアサポート活動に教育的な意義があることを提言するならば、ピアサポート活動を通していかに学生が発達していくのかを実証し、知見を蓄積していくことが不可欠である。

2. 研究の目的

本研究では学生がピアサポート活動を通して発達しているか否かを明らかにする。ピアサポートを行うことによる成長は教育実践の現場では実感されている(e.g. 池本, 2009; 高橋他, 2009)ことであるが、それだけではエビデンスに基づいているとは言えない。本研究は現場レベルの実感を実証的に検討し、教育効果の根拠を示す(図2)。

上記の目的を達成するために、具体的に以下の2点を検討する。

第1に、学生ピアサポーターへのインタビューと、ピアサポートに関する先行研究から、ピアサポート活動を通じた発達を測定する尺度を作成する。インタビューは複数の大学で調査協力を依頼することを予定している。複数大学の協力を得ることで、より一般化できる尺度が構成できる。

第2に、作成した尺度を用いて1年間の縦断研究を行い、ピアサポート活動による学生の発達過程を検討する。第2調査についても、複数の大学に調査協力を依頼し、各大学のピアサポート活動の特徴を踏まえた発達の要因を探る。

3. 研究の方法

まず、尺度を作成するために、先行研究のレビューを行う。次に、2019年の5月頃より学生ピアサポーターにインタビュー調査を行う。グラウンデッド・セオリー・アプローチ(e.g. 戈木, 2016)に従い、データの分析はインタビュー調査と同時並行で行う。インタビュー内容は主にピアサポート活動を通して感じた成長や、考え・能力の変化などである。インタビューの所要時間は45分~60分程度を予定している。

これらの知見を元にピアサポート活動による発達を測定するための尺度を構成する。尺度の構成に際し、ピアサポートに携わる教職員の助言や学生ピアサポーターへの予備調査を参考に表面的妥当性と内容的妥当性を高める。

作成した尺度の信頼性と構成概念妥当性は、質問紙調査によって確認する。調査対象者は学生ピアサポーター150名と、ピアサポート活動に参加していない一般学生150名を対象とする。McDonald's α 等を信頼性係数として報告する。構成概念妥当性の検証として、先行研究からピアサポート活動に関連すると考えられる尺度との相関係数を求める。また、相関係数や因子モデルをピアサポーターと一般学生とで比較する。

第2に、ピアサポート活動を通じた学生の成長過程を実証する。本調査では過程を捉えるため、4回の縦断調査を行う。2回目以降の調査では、回答者のEメールアドレスとインターネット上

の回答フォームを用いて、縦断データを得る。

4．研究成果

第1に、ピアサポートプログラムに参加する学生へのインタビュー調査を行うことができた。これにより、ピアサポートプログラムに参加する動機・期待と、実際の活動の中で得られる充実感や成長感との関係を質的に検討することができた。

第2に、新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）の影響下におけるピアサポート活動についてインタビュー調査を行うことができた。本研究の2年目にあたる2020年以降、COVID-19の感染が拡大し、各大学で実施しているピアサポートプログラムに大きな影響が生じた。それまでピアサポートプログラムは対面での活動を前提に設計されていることが多く、COVID-19の拡大によって対面でのサポート活動が行えない状況に対応する必要があった。そこで、本研究ではいかにCOVID-19の影響下においてピアサポート活動を継続・発展させるかという課題に対する資料を得るために学生ピアサポーターとピアサポートプログラムの運営を担う大学職員にインタビューを行った。その結果、COVID-19の影響により対面での教育や交流等が制限されていても、新入生をはじめとする学生への支援に意欲的な学生が一定数いること、ただし、その意欲が対面での交流を通して喚起されないために、職員の積極的な介入が必要となることなどが示唆された（永井、2022）。この結果は、日本ピア・サポート学会が発行するピア・サポート研究第18巻に掲載された。

第3に、ピアサポートプログラムを導入している大学に調査協力を依頼し、2021年7月から2022年4月までの約1年間に渡る縦断調査を行った。COVID-19の感染が収まらず、学会等で直接調査協力を依頼することはできなかったものの、郵送およびメールにて26大学の教員・職員に協力を依頼した（これまでに交流のあった教員・職員の大学含む）。その結果、12の大学・短期大学に所属する学生ピアサポーターから協力を得られた。本研究の結果、ピアサポートプログラムへの参加が支援スキルや活動への意識などに影響する可能性が示唆された。本研究の成果は学術誌への投稿を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 永井 暁行	4. 巻 7
2. 論文標題 金沢星稜大学における在学生から新入生へのサポート体制についての探索的検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢星稜大学人文学研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井 暁行	4. 巻 18
2. 論文標題 COVID-19の影響下におけるインターネットを活用した非対面のピア・サポート活動実践の紹介 学生および担当職員へのインタビューより	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ピア・サポート研究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山上 史野・永井 暁行・林 幸史・水野 治久・高橋 美保・木村 真人	4. 巻 25
2. 論文標題 ウィズコロナ時代の大学教育とは-コミュニティ心理学から考える-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コミュニティ心理学研究	6. 最初と最後の頁 118-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井 暁行・廣川 和貴・佐藤 淳哉・中村 和彦	4. 巻 57
2. 論文標題 ピア・サポート活動への参加と主体的学習態度の関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部北星論集	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 NAGAI, Akiyuki
2. 発表標題 Development of thinking and relationships through a peer support program in Japanese University and Junior College.
3. 学会等名 The International School Psychology Association (ISPA) Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永井暁行・佐藤淳哉
2. 発表標題 ピア・サポート活動による批判的思考および協調性の変化 1年間の縦断調査による検討
3. 学会等名 日本ピア・サポート学会第18回大会(高知工科大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nagai Akiyuki
2. 発表標題 Development of thinking and relationships through a peer support program in Japanese University and Junior College.
3. 学会等名 the 42nd annual conference of the International School Psychology Association (Nicosia, Cyprus) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------